

チャ寄生性ミカントゲコナジラミ防除適期拡大のための各種薬剤の殺卵効果

はじめに

近年、本県の茶産地でミカントゲコナジラミが発生し、その分布は急速に拡大しています。本害虫が大量発生すると、成虫の飛翔による労働環境の悪化や成葉でのすす病の発生にとどまらず、樹勢ひいては収量、品質への悪影響も懸念されます。茶では新しい害虫となるために登録農薬も少なく、生産現場では対応に苦慮しています。

本害虫の防除適期は1齢、2齢幼虫期にあたる若齢幼虫期（大串,1969）とされ、その防除の目安としては、成虫の発生が終息した時期と言われています。しかし、防除適期にあたる成虫発生が終息する時期は、卵から3齢幼虫までが混在し、若齢幼虫主体で構成される期間は非常に短いと思われます（図1）。目安の成虫収束時期よりも早

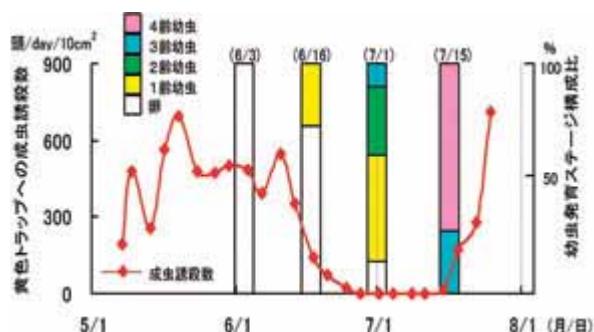


図1 越冬世代ミカントゲコナジラミ成虫（線グラフ）の発生消長と幼虫発育ステージ構成比（棒グラフ）の推移

いと卵の構成割合が高くなりますので、若齢幼虫に対する防除効果が高く、かつ殺卵効果の高い薬剤を用いることで防除適期幅の拡大が図られると

考えられます。また、今後の本害虫への農薬登録の基礎資料ともなるので、茶栽培で一般的に用いられている薬剤の殺卵効果について調査しました。

調査方法

圃場で2番茶摘採残葉に産下された卵を枝葉ごと採取し、室内で浸漬法により各薬剤を処理、21日後に供試虫の生死を判定し、水処理を対照として補正殺卵率を算定しました。

結果および考察

図2に調査した結果を示しました。殺卵効果は、薬剤によって大きく異なりました。ロディー乳剤、テルスターフロアブル、ハチハチフロアブルは殺卵率100%で、次いでダントツ水溶剤、アプロードエースフロアブル、ダニトロンフロアブル、マイトクリーンフロアブル、ダニゲッターフロアブルが90%以上の殺卵効果を示しました。また、現在ミカントゲコナジラミに登録のある薬剤では、アプロード水和剤の殺卵効果が低く、本剤を卵が多い時期に使用すると防除効果が低くなる可能性があります。

ただ、ミカントゲコナジラミの卵・幼虫は葉裏に生息しており、樹冠内部やすそ部の寄生密度も高いので、樹冠内部の葉裏にも薬液が到達するよう丁寧に薬剤散布することが大前提となります。

（茶栽培加工チーム 宮本大輔）

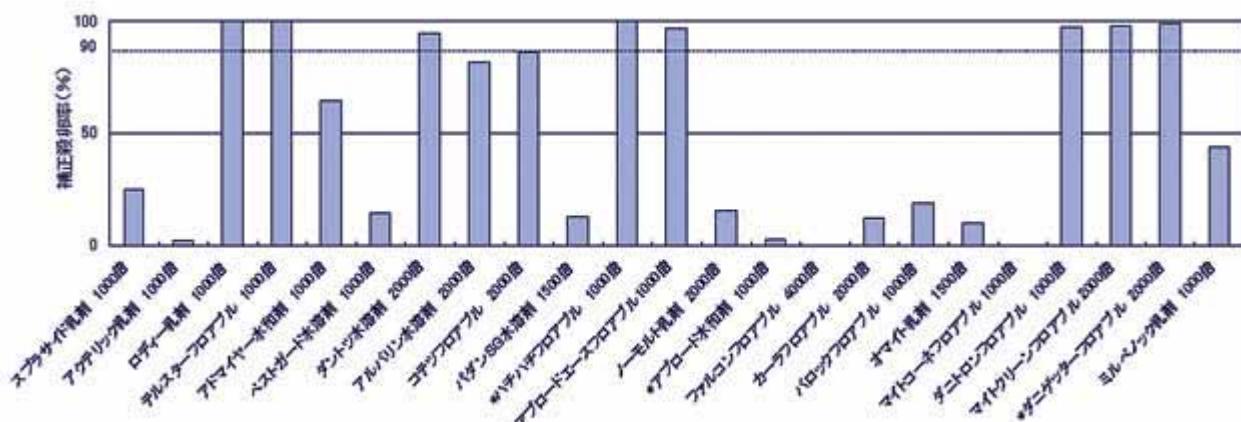


図2. ミカントゲコナジラミ卵に対する各種薬剤の殺卵効果（＊はチャのミカントゲコナジラミに既登録）